



チェコ、イギリス、スペイン  
**文化交流の旅エッセイ**

平成21年10月12日～25日まで

田中成美 著

2ページへ



写真で見る求道館、71フォートストーリーランドを  
まわすまで遊園地めぐり



## プロローグ

今、私の手元には一枚の絵葉書がある。

裏には2人の女性の名前と住所が書かれている。

ケンブリッジ大学で水を買いに寄った時に、売店で働いていた若い売り子達がくれたものである。当日は一人旅をしていたので、話しかけやすかったのだろうか、いきなり質問攻めにあってしまった。

「日本に帰ったら、絵葉書くださいね」と、ガイドブックも地図も持たなかった私に同情してか、キャンパスの地図が載った絵葉書をくれたのだ。

一人旅はこういう事が頻繁に起こるから面白い。

今回の旅は5人グループであったが、一人で行動する事も多く、私スタイルのとても思い出多い旅となった。

また、今回の旅の当初からの最大の目的だった、「茶道」や「居合道」のデモンストレーションもできて、意義深さが一層増したようにも感じた。

ここに、そのような旅のハイライトを御紹介させていただきたいと思い、簡単なエッセイをまとめてみた。



ホテルから一歩出ると、寒風が頬に突き



刺

ケンブリッジ大学中、有名な数々橋

旅のハイライト



## 1、ブラハで

さって来る。「ウッ、さむーい！」と、思わず身を縮めてしまった。気温は3度位だろうか。

先週までは20度近くあって、上着は要らない位だったそうだから、皮肉なものである。

熊本を、まだ暗い午前4時頃に出た私達5人は、待ち時間も含めて約20時間のフライトをした事になるが、その割には元気であった。

思えば、今度の構成メンバーは多彩である。

居合い道の先生であるNさん、そのお弟子さんであり、健康食品や天然石のお店を持たれているTさん、Nさんのビジネスパートナーで建築デザイン家のUさん、今回は休暇として参加した旅行代理店勤務のSさんと、それぞれに自分の確固たるライフスタイルを持った人達だ。

旅行会社に勤めるSさんは、ブラハ第1日目の朝に2時間ぐらいの市内観光バスツアーを、国内で既に手配済みであった。Sさんは、さすがに旅の手配に慣れていて、いつも何もかも自分でしている私には、随分と手が省けた事も多くて助かった。

さて、バスツアーの集合時間が来て、寒風を避けることもできるので、ありがたい思いでバスに乗り込んだ。運転手がヘッドフォンから日本語ガイドが聞けるとジェスチャーで伝えると、みんな喜んでセットしていた。

説明が流れ出した。

「変な日本語...」と言いたくなる様な感じがしたが、理解は出来る。

「1200年の栄光と苦難の歴史を刻んできたブラハは、モルダウ川

の東岸に位置し、様々な建築様式を今に残す中世都市として、世界遺産に登録されています...」

「えっ、モルダウ川！！？」

私は驚いた。



## プラハで

スメタナの「モルダウの流れ」は私も大好きな曲なので、時々聴いているが、ここを流れているとは知らなかった！

ガイドブックには「ワルタヴァ川」と載っていたので、気付かなかった。何と言う間抜けなことか！

瞬間的に、脳裏にあの美しい調べが蘇えり、プラハ訪問の感動が盛らんだ。



プラハ市内の様子



チェスキー クルムロフの景色

チェコ





## 2、居合い道の交流会

午前中に観光バスツアー、午後は自由行動で、それぞれ個別的に観光を終えた私たちは、ブラハ訪問第一の目的と言える「居合い道交流」に向けて、それぞれの支度を整える事となった。

ブラハ城では長蛇の列が出来ていたため、1時間と言う短い時間ではお城の中に入る事は到底できなかったのも、ある無念さを残しつつも、私はホテルの部屋で着物の着付けに取りかかった。こういう点では、自分で地下鉄やらバスやらで行く方が都合が良いと思いつながら、何時間でも、一日中でも、同じ場所に居れるからである。

午後の自由時間を、いつもの単独な我流スタイルで、のんびり過ごし過ぎてしまった私は、40分足らずで着物を着てしまわないといけない事になった。

腕を後ろに回したり、鏡を見たり、奮闘は始まった。

思えば、何年と袖を通してなかったこの着物にとっても、この世界遺産の街ブラハで来てもらって、さぞ嬉しいことだろう。

同室のSさんとアドバイスをし合ったりして、どうにか着物の形を整えてロビーに降りると、程なくN先生とTさんが凛々しいはかま姿で降りて来られた。

さあ、中世ヨーロッパの世界遺産の街で、着物と袴で闊歩する時が来た。ブラハの人達はどんな反応するのだろうか、楽しみであった。



ブラハ城で

## 2. 居合道の交流会

午後5:30に「日本刀研究会」と呼ばれる、プラハの居合道グループからのお迎えが来た。地下鉄で郊外の練習場まで行くとの事であった。

「この姿で地下鉄に乗れば、さぞ人目を引くだろうなあ、…」と、危

惧しながらも、お迎えの人が自前で買ってくれた地下鉄切符を手に握り締め、しとやかに電車に乗り込んだ。

さぞジロジロと見られるだろうと思いきや、そこはやはり個人主義の西洋の国である。さほど、人々は私たちの衣装に関心を持ちつつも、ジロジロ眺めるような事はしない。チラッと見ただけですぐ視線はあちらに流れて行く。こういう所は、日本とは大きく違う点である。そういう点では他と異なることが気にならなくて気持ち良いし、人々も個性も伸ばしやすいだろうと想像した。

以前、ある外国人から聞いた話が思い浮かばれた。

「私は髪を染めて黒くしたい、電車に乗ったとき等に、皆がジロジロ見るのが耐えられない」と、その女性は言っていた。異質な物を受け入れる素地がまるで違うことを、納得させられた。

道場につくと、20人ぐらいの男女が袴姿の稽古着を身につけ、私達をズラリと並んで迎えてくれた。

リーダーの掛け声とともに、みんながきれいに正座し、そして深々とお辞儀をした。両手の先を揃えた立派なお辞儀で感心だった。

やがて、NさんとTさんの実演が始まり、「エイ、ヤー！」とゴザを硬く巻いた物や、青竹を真剣で切り離した時は、無言の賞賛が感じ取れた。

私も居合いを目にするのは初めてだったので、興味深く見せてもらったが、なかなか迫力があって素晴らしい。



### 3、日本刀研究会

西洋人は、こういう姿に「サムライ」をダブらせるのだろうか。

今や、ヨーロッパ

全土で、とても人気があるらしい。

稽古の後は食事会があり、おいしいチェコの地ビールをいただきながら、この会の若者達とお話することができた。

日本語を流暢に話す人、書道を稽古している人、私があげたティーバッグを見て、「これは玄米茶ですね」と、難なく漢字で書かれた「玄米茶」を読めた人、そんな人達を見て

「この人達の日本文化熱は生半可ではない！」と、感ぜずにはおれなかった。

いったい何が彼等をそこまで惹きつけるのか？

この時代に岡倉天心や夏目漱石が来たら、どう思うだろう。

西洋文化の影響で日本の伝統芸術が減る事を憂えた彼等は、こういう時代が来るのを想像できたであろうか。

思わず自分の着物の着崩れを正したくなる気持ちに駆られてしまった。



チェコ人も着物がよく似合う

前のページ



次のページ

### 3、日本刀研究会

ブラハでの最終日は、バスで片道3時間くらいかかる、チェスキークルムロフまで出かけた。現地手配のバスツアーで、ガイドは英語とスペイン語を話すというので、スペイン語を習い始めていた私には、ちょっと楽しみが増えた感じがしていた。

予定時間にバスに乗り込むと、そこはまるで世界の縮図であった。

様々な国から来た旅行者が様々な言葉で語り合っている。

私の英語スクールの講師の一人がキューバ系アメリカ人のせいもあって、いつの間にかスペイン語を習い始めていた私は、まだ入門レベルながら、スペイン語は聞き分ける事が出来た。

バスの車窓からは、ボヘミア地方の美しい丘陵に田園地帯が広がっている。時々、静かなるモルダウの流れをうっとり眺めながら、ノンストップの3時間のバstriップが、やっと終わりに近づこうとしていた。3時間もの間、トイレ休憩も何もないというのも以外であった。

やっと着いた後、お城の中へ歩いて行く途中で、無情にも「みぞれ」が降り出した。寒さに身を縮めながらも、ガイドについて歩いて行くしかなかった。

しばらくすると、城の塔が見え、私達はその中に入って行った。狭い階段を上っていくと、広い通路のようなところに出た。ガイドが指差す方を見る

と、そこから街の全貌が見えるようになっていた。

「言葉を失うほど美しい！」と言う形容がぴったりであった。遠方には緑の台地が広がり、眼下には大きく屈曲したモルダウ川、そしてその川を中心に赤い屋根が並んでいる。

Sさんと私が交互に写真を撮り合っていると、隣にスペイン語で話している家族がいた。

この数ヶ月間、スペイン語をかじった私は、ちょっと話してみたいくなった。

“ Soy de Japon. Donde esta Usted ? ” 「私は日本からですが、どちらからですか？」



## 4、チェスキー クルムロフ

"Soy de Madrid"「マドリドからです」

その若者はイギリス留学中で、英語も堪能だったので、スペイン語と英語のミックスで話が弾み、御両親とも親しくお話する事が出来た。

その後、しばらく一緒に行動したが、私達への色々な気配り、御両親の面倒も細かく見て、なかなかしっかりしている。

外国でこの年代の若者と出会うと、日本の同じ年頃の若者と、ついつい比べてしまうが、なかなか成熟していて、しっかりしているし、「大人」である。

やはり、幼い頃から「自立」を植えつけられるからだろうか。

ランチタイムには、このお父さんからホットワインをご馳走いただいたのも、今では心温まる思い出である。



スペイン留学時

スペイン



ブライトンに住むアンと私は7年の付き合いである。

## イギリスのブライトンで

7年前に、イギリス在住のある日本女性が企画した「日本体験ツアー」に参加して、御主人と一緒に郡陽町にやって来た。全体で約15名ぐらいのイギリス人訪問団だったが、当時私がやっていた国際交流クラブで受け入れたのが、縁であった。

「折り紙体験」、「日本料理体験」、「清和村と人形浄瑠璃の一日旅行」等企画し、ホームステイ先も探したりして、結構大変な思いでしたが、イギリス訪問団と日本側のホストファミリーからは、とても喜ばれた。

そしてその中に、何故か私に興味を持って、色々とお話しかけてきた女性がいた。

それがアンだったのである。

とにかく声が大きく、自己の意見をはっきりと持ち、白黒をはっきりとさせないと気に入らない性格のようで、どこか私と似ているのだろうか。それから7年間の交流が続いて来た。

さて、オリンピックの準備のおかげで、すっかり新しくモダンになったヒースロー空港から、車で1時間30分ほどでアンの家に着いた。この車の手配もアンがしてくれていて、運転手は途中で2回ぐらい途中報告を入れることまで約束してあるらしく、いかにもアンらしい手配の仕方を感じた。

家の前で車が止まると、アンと御主人のイアンが笑顔で迎えてくれた。アンは、

「やっと来たね！7年もかかったね！」と、しっかりと歓迎のハグをしてくれた。

普段はジーンと来る事などあまりないドライな私であるが、さすがにこの時は胸の奥底が熱くなるのを感じてしまった。

さっそく家の中へ案内され、各部屋も見せてくれた。200年ぐらい経つジョージア時代の家だそうだが、イギリスでは、家は古ければ古いほど高価なのだ。

イギリスの古い家は、なかなか味わいがあるって私も大好きである。古くて

も、セントラルヒーティング等の設備は完璧で、洗濯機等も最新型で、生活は快適であろうと想像できる。



## 5、イギリスのブライトンで

壁には、着物も何枚かかけてあり、日本の物だけを置いてある「日本の部屋」もあったりして、さすが日本通のアンである。

また、いくつかある部屋で最も広くてよい部屋は夫婦の部屋であると言うのも、西洋の家の特徴である。アン夫婦の部屋も、一番良い場所に合ってドアも広く、最も大事な部屋と想像できた。私達日本の家で最も重さを置いてあるのは、やはり応接間であろう。その背後にある価値観に思いを馳せるのも面白い。

庭に目をやると、色々な草花が緑濃い芝生に映え、秋風に揺れていた。無造作に色々な花を飢え、全体的の調和の取れた典型的な「イングリッシュ・ガーデン」であった。

お庭の隅には「東屋」もあって、夏にはそこで食事をしたり、友人を招いてバーベキューを楽しんだりするそうだ。

ハウズツアーが終わってキッチンでお話していると、窓辺に鮮やかなピンクのコスモスが秋風に揺れていた。どこか、私達を歓迎してくれているようであった。



アンとアンディ

## ホームステイ

アンの家にステイしたのは、居合い道の先生のNさん、建築デザイナーのLさんと私の3人であった。他の2人はそれぞれ別の家にステイしている。

一通りの家の案内を済ませた私達3人は、リビングルームへと案内された。そこで、紅茶とおいしいケーキが振舞われ、ゆっくりと1時間ぐらい談笑した。そして、今度は食前酒が振舞われ、また1時間ぐらいお話をして、それからダイニングキッチンへディナーへいざなわれた。時間はあくまでも、静かに、ゆっくりと流れて行く感じであった。今年の4月に2人が我が家にステイした時の、懐かしいおもてなしをした事が、一瞬悔やまれてしまった。

ディナーテーブルに着くと、大きなチーズが数種類テーブルに置いてあって、これはワインのつまみと言ったところであつたらう。イアンが取って置きのワインを空けてくれ、「CHEERS!」と、また乾杯をしてディナーが始まった。

この時の私達のお話の相手は、アンだけである。なぜなら、イアンは食事の準備に取り掛かったからである。かたわらで忙しく動いているイアンをよそに、アンはゆっくりと椅子にすわり私達とお話を楽しんでいる。

それを見たお二人の日本男性は、「感心ですねー」、「偉いですねー」としきりにうなずいていた。

イアンは大学の教授だから、立派なイギリス紳士である。料理のたしなみもジェントルマンの心得のひとつなのだろうか。

何日も前から、料理の下ごしらえはしてあったらしく、意外と早く数種類の料理がテーブルに並んだ。特においしかったのは、じっくりとソースと煮込んだ豚肉料理であった。

イアンもテーブルにすわり、ディナーが始まった。ワインの次はスコッチウイスキーも振舞われ、みんなすっかりほろ酔い加減であった。

食事のときも、重要な要素は「会話」である。お二人の日本での体験談や、菊陽で交流し



## ホームステイ

たときの思い出話などに花が咲き、あっという間に2時間ぐら経っていた。

その後はまたリビングに移り、今度はイアンが暖炉に火を入れてくれて、すぐに赤々と燃えたった。

そして、火を眺めながらの会話となった。

西洋人は本当に「会話」を楽しむ。

単一文化に基礎を置く私達日本人は、ややもすると、「以心伝心」に頼りすぎて、言葉不足になる事も多い。言葉足らずは、誤解を生みやすい時代となって来た。少し、この「会話」を楽しむ事を私の生活にも取り入れたいと、赤々と燃える火を見つめながら考えた。



## 野外ミュージアム

アンの息子達の部屋で一夜を過ごした翌日の予定は、車で1時間ちょっとかかる、シングルトンと言う町にある「野外ミュージアム」に出かける事であった。建築関係の仕事をしているNさんとUさんのために、特別に企画してくれたらしい。そのミュージアムは、16世紀当時から古い農家や納屋や作業場、民家などをイギリス中から移築してあるそうである。

ちょっと疲れているアンを残し、イアンの運転でそこへ出かける事となった。

ドライブを始めて10数分もすると、遠くに美しい丘の連なりが見え出した。イギリスの田園地帯である。イギリスを訪れるのは今回で6度目であったが、重なり合う丘陵地帯に広がる田園風景は、何度見ても本当に「美しい」！

イアンがきれいなクイーンズ イングリッシュで語りだした。

「こちら辺りでは、数年前に工業団地が出来る計画が持ち上がったが、住民の反対で中止になった」と、誇らしげであった。やはり、民主主義の歴史が長い国の住民は、パワフルであると感心する。

イギリスを含むヨーロッパ諸国では、この田舎の美しい景観は、「天然資源」と捉えられ、農家戸別補償も含めて、かなり多くの税金を次ぎ込んでいると言う。食糧確保の重要性も、歴史上の教訓として学んでいるはずだから、農業保護は国民の総意であるのも頷ける。

野外ミュージアムの中に入って見ると、色々な古い建物が移築しており、興味深かった。建築デザイナーのUさんは、ひっそりとした写真を取っていた。

ある古い農家を見ている時にイアンが言った。「この大きな部屋は、地主家族達の部屋で、小作人達はこっちの大広間で寝ていたんだよ」

やはり、作家「五木寛之」も言っているように、格差社会は古今東西あるらしい。

ふと、このミュージアムはいったい誰が建てて、誰が運営しているのだろうかと疑問を持った。日本ならば、国と県、それに町とかが私達の税金から、出資する

## 野外ミュージアム

のが普通であろう。

しかし、ここはイギリスである。パンフレットを読んでみると、この施設は人々の寄付でなり  
りしていると書いてあった。

ちょっと日本人にとっては、ピンと来ない話であるが、個人や企業の寄付が主な財源な  
のだ。その他、ミュージアムの入場料やワークショップなどの色々な参加費、そして土産  
物などの売り上げ等も、もちろん大事な収入源である。働いている人のほとんどが無償  
ボランティアだそうだ。さっと年金も充分出てて、老後不安がないから出来るものと思え  
る。なぜ、こんなに「寄付」が盛んなのだろうか。

その大きな原因は、イギリスでは「寄付」は丸ごと税金控除になるのである。節税対策と  
しても有効な手段だと言うわけだ。もちろん、歴史的にも、文化的にも、宗教的にも、そう  
いった「寄付」が社会的にリスペクトされている事は言うまでもない。また、こう言ったチャ  
リティで運営されている施設は、病院や学校等も含めて本当に多い。

日本も税金だけ頼らずに、こういう寄付金の節税効果を高めたら、国債発行額も減っ  
て脱税も少しは減るのではないかと思う。



色々な歴史体験ができるようになっているし、伝統工芸の保存活動もしている。

## 着物の好きな女性と

ブライTON訪問の、もうひとつの大きな楽しみは「お茶会」であった。Nさんのお弟子さんでもあるチャップマン宅で、隣人や友人を招いての「お茶会」が企画されていた。

当然、私も着物を着るのであるが、この日はもうひとつ大きなお役目を頂戴していた。アンの友人の2人のイギリス人女性に着物着付けをしてあげるのである。

聞くところによると、その中の一人は、日本人男性と結婚しているが着物は持たず、着物を着るのも初めてとの事。もう一人の女性は、逆に着物大好きで、小物を含む、着物着付けに必要な物ほとんど全てを持っているとの事であった。

約束の時間が来ると、その着物大好きなイギリス人女性がやって来た。大きな包みを手くに、「今日は本当に楽しみにしていました。この着物のランクなども教えてね」と、目を輝かせながら、さっそく箱を開けて見せてくれた。

中には、京友禅や小紋、趣味の着物風なのが3枚入っていた。また

帯は一本、そして他の小物もぎっしりと詰まっている。

「素晴らしいですね。いったいどこで買うんですか？」と尋ねると、

「インターネットよ。日本のサイトで買うの。着物は1000円ぐらいで買え

るのだけど、送料が3000円もかかって大変、でも、楽しいわ。なかなか着ることがないので、時々引き出しから出して眺めて楽しむの。あ、そうそう。UTubeで着付けも覚えたから、アドバイスはしてもいいけど、絶対に教えないでね。」と、意外な依頼事であったが、日本の着物にそれほどの愛着を持ってもらうことに感謝したい気持ちさえた。

彼女の着付けを眺めていると、なかなかスムーズに着付けていて感心した。前で結んだお太鼓を後ろに回して、はい出来上がり！

ページ





## 着物の好きな女性と

帯締めの変った結び方を教えてあげたら、とても喜んでくれた。

また、私の肥後象嵌の帯留めにも、とても興味を示して、「そういうのが欲しい」と言っていた。ひょっとしたら、今頃はネットで手に入れてかもしれない。

もう一人の女性は、着物を持ってないので、アンが持っていた大島袖を着せてあげた。襟元に赤い半襟を覗かせてあげて、帯締めも赤系統にしてあげた。西洋人は色白だから、この手の組み合わせが本当に良く似合う。

チャップマンの娘さんも着物をSさんから着付けてもらって、Sさんも含めると、5人の着物女性がブライトンの青空の下で華やいでいた。



着物が大好きなイギリス人女性と



チャップマンの娘さんで、着物や茶道が大好き。

あつた。

チャップマン家の庭の片隅にある小さな建物の中に作られた、今日のお茶会用のスペースは、「お茶会をしたい」と言う、イギリス人の気持ちに動かされた会場であった。

前もってお茶道具一式を送られていたNさんのおかげでもある。「居合い道」と「茶道」は、一見似ても似つかないものであるが、「茶の本」を書いた岡倉天心も、日本の美として「武道と茶道」を同一のものとして扱っている。

私も、茶道は10年以上お稽古したことがあり、「唐物」と言って、一応は「教授」の免状を持っているので、この日が迎えられて本当に嬉しかった。

三々五々と集まってくる人達を、お茶室にお招きして、いよいよ始めることとなった。

Sさんが、「Nさんがお手前、私がお水屋をしますから、成美さんはお正客をしてお茶のいただき方の説明をしてください」と、いつもながらのテキパキ指示が飛んだ。

数年のブランクがあり、お手前は出来ないものの、いただくのは大好きだから喜んで承諾した。

イギリス人達は思い思いの格好で、敷かれたゴザの上に座っていた。

まず、お菓子の事や季節感の事、お茶をいただく時の心得などを簡単に英語で説明した。

ついでに、何故お茶碗の正面を避けるのか等の意味も、自分の知る限りのことを英語で説明した。非常に深い意味のある茶道の動作である。それほど詳しい説明でもなかったが、参加者達は熱心に耳を傾けてくれた。

BBC放送では「侘び、寂び」のテーマで、1週間ぐらいのテレビ特別番組もあったそうであるから、日本文化への興味も驚くほどである。



## お茶会

しかし、チャップマンは「結局、詫び寂びって何の事が分からなかった」と言っていたので、茶道の深遠さは、とても一回のお茶会では到底無理である。

でも、お茶が終わって出てこられたある老婦人が言われた。

「スターバックスコーヒーとは全然違いますね。優雅な動き、ゆったりした静かな時間、そして丁寧に点てられたお茶は最高でした」と言われた。

このような深遠な芸術を育んだ日本に誇りを感じると同時に、「大事に残して行きたい」と思った瞬間だった。



静い茶が日本の雰囲気を出した



ロンドンでは、UさんとNさんはある日本レストランの改装の仕事を請け負う事になっていて、その下見で張り付き状態。Sさんは友人宅の訪問、Tさんはロンドン観光と、またもや個別的行動となった。私は、かねてから行きたいと思っていたケンブリッジ大学と、翌日はバスへ行くことができて、思い残す事のない今回のイギリス訪問となった。

その後、SさんとTさんは仕事の都合で、私達より一足早く日本へ帰国したが、Nさん、Uさん、それに私はスペインのバルセロナに3泊した後で帰国した。

バルセロナでも様々な思い出を作ることができたが、やはり一人で行動した時の事は鮮明に蘇る物である。

例えば、ある地下鉄の駅から外へ出ると、どちらがどちらなのか、まるで見当がつかなかった時がある。仕方がないので、近くの売店で何か買って、ついでに道を尋ねる事にした。

下手なスペイン語が功を奏したのか、店主は店を出る私にキャンディをくれた。

「楽しい御旅行を！」と言う言葉を添えて。

よく、「私は英語が苦手だから...」と言って、一言も英語を判しない方を見かけるが、下手でもその国の言葉を使おうとするのは、その国に敬意を払っていることにも繋がる。とても好感を持たれるので、一単語でもいいから言ってみる事をお勧めしたい。



## トピロ・グ

今回の旅のハイライトは、何と言っても「茶道」や「居合い道」を通して、日本の伝統芸術を紹介できた事である。

いつもは、外国人を招いて異文化を紹介する活動をやっている私にとって、言わば逆の事をしたわけであるが、とても楽しかった。

また、グローバルな時代を迎えた今日、「茶道」そして「武士道」が、これほどまで人気が出ている事には本当に驚嘆した。

"East is East, West is West, and the twain shall never meet."

(東洋は東洋、西洋は西洋、この二つは決して会合することはない)

これは、キプリングの有名な言葉であるが、21世紀は「会合することを求めて止まない」時代だと実感した。

(終わり)



ローマン・バスは聖なる源泉

このバスの水は聖なる源泉と信じられてきた

